



アフリカ 可能性を生きる農民
- 環境 - 国家 - 村の比較生態研究

島田周平 著

国レベルの政策環境の理解と、村レベルの実態把握を組み合わせる農村をとらえるアプローチは、近年のアフリカ研究ではますます重要性を増している。本書ではこれに加えて、人間と環境の関係を歴史的・政治的文脈で理解しようとするポリティカルエコロジー論を取り入れ、さらには地域間比較研究の視点からアフリカ農村を分析するアプローチを採用している。かなり挑戦的な著作である。

全12章からなる本書は、ポリティカルエコロジー論を解説した理論的部分、ナイジェリアおよびザンビアのそれぞれのケースを取り上げた部分の、3部構成から成り立っている。なかでも重点がおかれているのは、著者が長年にわたって継続的に調査を続けてきた、ナイジェリアとザンビアの農村における人々の暮らしの変化の分析である。本書ではその変化の内容が、国と地域の歴史、政府の政策変化、地域の権力関係、人々が採用する経済戦略などと複雑に絡み合っ現出している様子を、克明に描き出している。特にザンビアの一農村の分析では、この村に起こっている変化が、植民地政府の政策、地域の伝統的政治制度、近年の複数政党制導入、開発NGOの活動、HIVエイズの拡大など、さまざまな影響を受けて展開していることが示されていて興味深い。

最終章で著者は、地域間比較の分析から得られた二つの農村の共通性として、(1)人々の空間的移動の大きさ、(2)経済活動における多生業・多就業性、(3)自給的食糧生産を保持しつつ多様な機会を積極的にとらえる「変わり身の速さ」、をあげている。これらの点は、今後さらに事例研究、比較研究が積み重ねられることによって検証されるべき重要な仮説である。アフリカ農村のあり方は非常に多様であり、本書のような比較研究には大きな困難がともなう。しかし「そのような多様性にたじろぐことなくこのようなミクロな村落調査結果を蓄積すること」(p.139)が、今後のアフリカ農村研究の進展に欠かせないことは間違いない。

(高根 務)

京都 京都大学学術出版会 2007年 270p.



開発フロンティアの民族誌
- 東アフリカ・灌漑計画のなかに生きる人びと

石井洋子 著

1999年。ケニア山南麓のコメ生産地で、農民たちが米の自由化を求めて示威行動をおこない、警官隊と激しく衝突する事件が起こった。首都ナイロビで新聞を読んでいた著者は、その記事に惹かれ、「この人たちと共にくらし、国の開発計画に異議を唱えた人々の『生きる術』を知りたい」と思ったという。著者はその後5回ケニアにわたり、足かけ2年をかけてムエアと呼ばれる灌漑地域の農村に住み込んで調査を続けた。

その調査の結果が一冊にまとめられたのが本書である。大別して3部構成になっており、序論と総括を含め12の読み応えある論文で構成されている。第I部では「ケニア山南麓の景観と歴史」と題して射程が植民地時代までのばされ、第II部「開発フロンティア社会の形成と変容」では、ムエアへの入植が本格化した植民地時代の後期から、独立を経て現在までが視野に入れられる。著者をとらえた1999年の「事件」もその第7章で、語りや流行歌の紹介、家計簿比較などミクロな調査結果を踏まえて鮮やかに再構成される。続く第III部は「生計維持のための社会的実践」と題され、若年世代による「模倣の技術」、親族・姻族ネットワークの再構築など、著者が「知りたい」と願った、人々の「生きる術」が見い出されていく。

本書の主眼はこの生計戦略の解明にあるとみてよいが、実は、キクユ人の社会のあり方とマウマウ闘争についてたどった第I部歴史編も注目の仕上がりである。植民地時代の刊行物と、著者が出会った古老の語りとが織り交ぜられ、キクユの人々にとっての植民地支配のありようが、生き活きとまたきわめて堅実に跡づけられる。学位申請論文を下敷きに編まれたとされるだけあって、その他全般にわたって、用語の定義づけ、文献レビューなどいずれも手堅い。ただし、文章は平易で読みやすく、美しい地図や図表、写真の数々も読者の理解を助けてくれる。重厚な論文集でありつつ、本としての質感や見やすさ、分かりやすさへのこだわりがこもった、おすすめの一冊である。

(津田みわ)

東京 御茶の水書房 2007年 291+xix p.



開発の思想と行動
 - 「責任ある豊かさ」のために
 ロバート・チャンバース 著
 野田直人 訳

本書は、2005年に出版された *Idea for Development* (Institute of Development Studies) の邦訳である。ロバート・チャンバースは、「参加型開発」の教祖ともいべき存在であり、『第三世界の農村開発』や『参加型開発と国際協力』(共に明石書店)といった著作がある。

本書の構成はかなりユニークである。全章(全7章)がそれぞれ二つの節で構成され、第1節で1969~98年に出版された著作を再録し、第2節は「それ以降に起こったことを振り返り、未来にむけてのアイデアを提供」(「まえがき」)するために、新たに書かれたものである。本来選集として予定されていたらしいが、それだけに終わらせず、現在からの視点を加えることで、内容に奥行きが生まれるのと同時に、開発学における時代の流れも感じさせて興味深い。

本書では、さまざまなテーマをとりあげ、「開発」を取り巻く現実を見つめ、これからの方向性を提示することが大きな目的となっている。したがって、その内容は、開発プロジェクトの試行錯誤の事例を紹介し、「開発」の背景にあるべき視点・思想についてより具体的に、丁寧に伝えることに主眼が置かれている。そのため各章のタイトルも若干抽象的で、第1章「言葉と概念 コミットメント、継続性、不可逆性」、第2章「援助と行政能力」、第3章「手続き、原則、そして権力」、第4章「参加 振り返り、反省、そして未来」、第5章「PRA、参加、そして規模の拡大」、第6章「ふるまい、態度、その彼方」、第7章「未来のために」となっている。

分厚い本であるが、各節の冒頭に簡単な要約が載せられており、それらに目を通すだけでも大体的内容を把握することができる。これを道標として、関心のある章に目を通すという読み方も可能である。用語解説や、略語や関連組織の情報、そして訳書では割愛されがちな参考文献が掲載されていることも、開発学を学ぼうという読者には大きな助けとなるであろう。

(児玉由佳)

東京 明石書店 2007年 531p.



新しいアフリカ史像を求めて
 - 女性・ジェンダー・フェミニズム
 富永智津子・永原陽子 編

本書は、国立民族学博物館地域研究企画交流センターの連携研究の一環である「アフリカ女性史に関する基礎的研究」(2000~2003年)、および国際シンポジウム「女性/ジェンダーの視点からアフリカ史を再考する 奴隷制、植民地経験、民族主義運動とその後」(2002年)の成果をまとめたものである。日本だけでなく、アメリカ、メキシコ、南アフリカ、タンザニア、ボツワナなどを拠点として活動する研究者たちによって執筆されており、アフリカにおけるジェンダー史研究の世界的な動向を知ることができる(ただし、ヨーロッパからの寄稿者は、残念ながらいない)。

本書は、5部構成で全15章からなっている。各部のタイトルは、第Ⅰ部「フェミニズムと歴史」、第Ⅱ部「奴隷制の再考にむけて」、第Ⅲ部「抵抗運動史の再検討」、第Ⅳ部「生活史の中のジェンダー闘争」、第Ⅴ部「歴史と文学のはざま 女性たちの語りから」となっており、第Ⅰ部で、アフリカ史におけるフェミニズムの視点の重要性を説いたあと、第Ⅱ部以降では、よりテーマを絞った形でアフリカ史の問い直しが行われている。

各論文の著者は、歴史学、政治学、文学などさまざまな分野から本書のテーマにアプローチしている。そのため、論文のみを並べるとまとまりのない印象を受けるが、各部には編者による「扉」の章があり、各部の見取り図が示されることで、各章がジェンダー史研究においてどのような意味があるのかについて理解を深めることができる。また、この「扉」では、新たな分析視角からの論点が提示されており、ジェンダー史研究への知的好奇心を刺激してくれる。

アフリカの「歴史のジェンダー化」(p.5)に真正面から取り組んでいる文献はこれまでほとんどなかったことを考えると、本書の存在は非常に貴重であり、重要な出発点であるとともに、現時点でのアフリカにおけるジェンダー史研究の一つの集大成ともいえるであろう。

(児玉由佳)

東京 御茶の水書房 2006年 xx+518p.+xiip.



アフリカの医療・障害・ジェンダー
- ナイジェリア社会への新たな複
眼的アプローチ

落合雄彦・金田知子 編著

ナイジェリア南西部ヨルバランドではよく知られた芸術家トゥインズ・セブン・セブンの作品が表紙を飾る本書は、そこに描かれたシンボリックな存在「アビク」を解説した、まえがきから書き起こされている。読者は、この一見不可思議とも映る絵画が発するメッセージと、それが単なるエキゾティシズムから選ばれているわけではないことを知るだろう。

2004、2005両年度に龍谷大学国際社会文化研究所における、サハラ以南アフリカの医療・保健・福祉に関する共同プロジェクトとして実施されたことから、その研究成果としての書名が冠されたと推察するが、副題にこそ本書のねらいが表れている。すなわち「特にナイジェリア社会のなかで、病気、障害、差別といった困難を生きる普通の人々の生とその周辺の諸問題を「複眼的」に考察すること」を、両編者は7名の書き手とともに試みている。

章立てに沿って列挙すれば、薬物依存、精神障害、身体障害、ろう、感染症、リプロダクティブ・ヘルス、産科瘻孔（フィチュリア）といったテーマに、多様な職業と専門分野をもった分析者が取り組んでいるが、いずれもがフィールドワークに根ざした内容となっている。また、フィールドに踏み込んでこそ出会った、現地の寄稿者からの論考・報告文が、両編者によって訳出されていることも特筆しておきたい。写真や図表もふんだんに掲載されており、各テーマに詳しくない読者にとっても大いなる助けとなっている。

なにより評者としては、本書が描き出すナイジェリアという社会のさまざまな側面と、そこに生きる人々の姿を、読者にもぜひ知っていただきたいと思う。

蛇足ながら両編者は御夫妻であり、専門を異にするとは言え、今回のプロジェクトだけでなく、ご一緒にナイジェリアでのフィールドワークを続けてこられた。その意味でも“複眼”によるアプローチが次には何を提示してくれるのか、評者としても期待してやまないところである。

（望月克哉）

京都 晃洋書房 2007年 x+257p.



アフリカのろう者と手話の歴史
- A・J・フォスターの「王国」を
訪ねて

亀井伸孝 著

酒井法子や柴咲コウがドラマでろう者を演じたり、教育テレビで手話講座が放映されたりと、近年日本でも手話が脚光を浴びている。しかし、ろう者に対する教育現場では、長い間手話は封印されてきた。発話の訓練に教育の重点が置かれ、手話を用いた教育はほとんど行われてこなかった。これは、日本のみならず、多くの先進国で共通している。聴者が教師となり、「恵まれない」ろう者を「聴者並み」にするよう訓練することが教育の目標だったからである。こうした考え方に対しては近年厳しい批判があり、手話教育の重要性が見直されつつある。

こうした状況を念頭に置くと、本書で紹介されるアフリカのろう教育の実態は驚くべきものだ。ろう者が教師を務め、ろう教育に従事する聴者は徹底的に手話を叩き込まれる。多くのアフリカ諸国では、ろう者に対する手話教育がごく普通に実践されるという、きわめて「先進的」な状況が存在するのである。

アフリカ諸国にろう者の教育機関を設立し、手話による教育の普及に尽力したのが、本書の主人公フォスターだった。本書は、アフリカ全域にまたがるフォスターの足跡を丁寧に跡づけるとともに、アフリカにおける手話言語やろう教育の特質・実態を詳細に論じている。読みやすさを意識して書かれているが、綿密なフィールドワークに基づく中身の濃い本である。

アフリカの開発問題を考える上で、本書は多くの示唆に富む。本書が紹介するアフリカの手話教育は、紛れもなく開発の「グッド・プラクティス」である。どのような条件が、それを可能にしたのか。アフリカのろう者は、いかに自らのオーナーシップの下でのエンパワメントに成功したのか。今日、「障害と開発」という問題が広い関心を喚起しつつあり、本書がその領域に対する重要な貢献であることは明らかだ。ただし、そこに限定されずとも、アフリカから何を学ぶかという観点に立てば、本書は多くのことを教えてくれる。広く読まれるべき本である。

（武内進一）

東京 明石書店 2006年 254p.



語りえぬ真実
- 真実委員会の挑戦

プリシラ・B・ヘイナー 著
阿部利洋 訳

凄惨な紛争や抑圧的な権威主義体制を経験した多くの国々で、過去の人権侵害に関して公式の調査を行う真実委員会が活動し、あるいはその設置が検討されてきた。数ある真実委員会のなかでも、南アフリカの真実和解委員会（TRC）は、知名度において、またその後の真実委員会というものに対する一般的なイメージへの影響力のうえでも、抜きん出ているといっていよう。しかし、本書を読むと、全国で公聴会を開催し、真実の告白と引き替えに加害者に特赦を与えるといった南アフリカのTRCのあり方は、実は真実委員会のなかで例外的な部類に属するということがわかる。評者の不勉強といえればそれまでなのだが、恐らくは、似たような誤解や思いこみは相当広く存在しており、そのことが筆者を本書執筆に向かわせた大きな動機となっているように思われる。

本書は、二十数カ国の真実委員会の経験をつぶさに検討し、真実委員会が具体的に何をしてきたのかを明らかにするとともに、その可能性と限界を考察している。南アフリカ以外ではラテンアメリカ諸国の印象が強い真実委員会だが、実は数のうえではアフリカのほうが多く、南アフリカのほか、ウガンダ、ジンバブエ、チャド、ブルンジ、ナイジェリア、ガーナ、シエラレオネ、モロッコ、リベリアの事例が取り上げられている。

真実委員会に対する期待は、いつも現実的に達成可能なレベル以上におかれる、と筆者はいう。本書は、真実委員会による和解や癒しへの過度な期待を戒め、過去の発掘が被害者に大きな痛みをもたらす得ること、大規模な人権侵害があった国でも真実委員会の設置が必ずしも望ましくないケースがあることを指摘する。さらに、「そもそも「真実」とは何か、という永遠の問いが残る。しかし、本書は真実委員会の意義を否定するのではなく、逆に、限界を認識し、現実的になることによって、その可能性を追求するという姿勢を貫いている。すぐれた研究書であると同時に、きわめて実践的な性格をもつ本書が、訳者の尽力により日本語で読めるようになったことを歓迎したい。（牧野久美子）

東京 平凡社 2006年 484p.



見る 撮る 魅せるアジア・アフリカ!
- 映像人類学の新天地

北村皆雄・荒井一寛・川瀬慈 編著

20世紀に発達した映像メディアは、商業的な映像作品だけでなく、膨大な数の記録映像を生み出してきた。近年、人類学や民俗学の分野では、こうして蓄積された映像を資料として活用するだけでなく、現地へのフィードバックや現地とのコラボレーションによる新しい民族誌映画制作の試みも行われている。本書はそうした映像を用いた人類学研究の可能性を追求した本である。映像作品の公表を行っている若手研究者や人類学的・民俗学的テーマに取り組んできた映像作家7人の論文を4部構成で収める。また、論文に対応して各執筆者が制作した映像作品7本を収録したDVD1枚も添付されている。

Part 1は、エジプトの神秘主義教団とインドのヴァギリと呼ばれる移動民の社会において、近代化の過程で生じつつある宗教的動向を扱っている。ことばでは表現しにくい教団導師の全体的な魅力や、移動民社会に新たに生じつつある呪術信仰の様子を映像に収めている。

Part 2は、エチオピアのラリベロッチと呼ばれる吟遊詩人と、タンザニアの都市住民組織の一つである伝統アフリカ音楽団を対象にした作品である。どちらも撮影する側と撮影される側の関係を改めて問い直し、両者のフィードバックによって映像作品を作り上げている。

Part 3では、カメルーンの森の民と神に奉納されたデヴォギと呼ばれるネパールの女性たちを撮影した作品である。その映像作品は「他者」を「撮る」という行為が、撮られる側のまなざしだけでなく、撮る側のまなざしをも反映することを映し出している。

Part 4は、沖縄のアカマタ・クロマタの祭祀に関する作品で、秘義を撮らないことで、秘義を担う島の住民たちの心象を逆にあぶりだそうと試みている。

貴重な映像でイメージを膨らませ、文章で映像の背景への理解を深められる本書は、専門家だけでなく、つい手にとってみたくなるはずである。

（岸 真由美）

東京 新宿書房 2006年 245p.+ DVD 1枚





アフリカルチャー 最前線

白石顕二 著

アフリカ社会文化に対する視点について著者に影響を受けた本誌読者も多いと思う。本書は在野のアフリカ社会文化研究者を貫いた白石顕二氏の遺作随筆集である。2005年6月に59歳で急逝するまで編集長を担当された『Do Do World News』掲載のエッセイのほか、音楽情報誌『ラティーナ』や氏が企画に関わった美術展や、映画祭のカタログに載った解説文を集めて刊行された。白石氏についての一般の認識は、1984年に始まる東京アフリカ映画祭の主宰者である点と、アフリカ社会研究者としてアフリカに渡った「からゆきさん」の研究や、ギニアビサウ、カーボベルデの独立運動を率いた社会思想家カブラルを紹介する著作に集中するかもしれないが、その活躍は約35年間、実に多岐にわたっている。その一端は白石氏にごく近かった関係者によって終章で紹介されている。

本書は、1999～2004年に書かれたエッセイが中心になっており、氏が1980年代に貢献されたアフリカ社会研究については限定的な紹介にとどまっている。著者は、われわれがアフリカの都市文化に対して同時代性の観察眼をもつべきであるとし、それを映画や音楽、現代美術の作品批評を通してわかりやすく解説している。特に、第1章には著者の最大の関心事だったのであろうアフリカにおけるドキュメンタリーフィルム制作の動向、エイズと生きる社会、アフリカ社会文化にとっての現代アートと伝統工芸の意味を問う渾身の作品が並び、この章に現代アフリカ都市文化のエッセンスが網羅されているといっても過言ではない。

後の章では著者のアフリカ都市文化論への視点はポストコロニアル論的に展開する時もあれば、第5章のアフリカ現代美術批評のように、洋画派と民衆芸術派といった保守的な見方を踏襲する時もある。いずれにせよ揺るぎないのは、西洋の眼差しからアフリカ文化人が決別し自立することを追い求める点にあった。氏による映画や美術、音楽の紹介は、まさにそのような視点を訴える活動家としてのフィールドワークであり、闘争の場でもあった。

(吉田栄一)

東京 つげ書房新社 2006年 222p.



黒いヴィーナス ジョセフィン・ベイカー

- 狂瀾の1920年代,パリ

猪俣良樹 著

アール・デコ、チャールストン、ジャズに沸き、「狂瀾」の形容詞が付される1920年代のパリに「ネグロ・レビュー」の一員として鮮烈に登場し、瞬く間にヨーロッパを魅了したダンサー、ジョセフィン・ベイカー。本書は、ヴォードヴィルに深い愛着を抱くジャーナリストである著者が、舞台の台本、当時の批評、時代背景を想像力豊かに吟味しながら、律動し熱唱するベイカーの身体が体現していた時代のアイコンとしての姿を活写したノン・フィクションである。

両大戦間期のヨーロッパ、とりわけ植民地宗主国となった国々では、物産や経済的貢献だけでなく、「文明化の使命」たる自己認識やエキゾチシズムを満足させる存在としての植民地に強い欲望が喚起されていたことがよく知られている。その欲望において、エロスが核的とも言える役割を果たしていたことは近年の研究でも指摘されているが、「黒いヴィーナス」あるいは「植民地の女王」と称揚されたベイカーは、まさにこの欲望がフォーカスされた存在であったと言えるだろう。

本書のもう一つの隠れた主題は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてヨーロッパで広く見られた「人間動物園」 非ヨーロッパの「原住民」を科学的に「展示」したり「見せ物」にしたイヴェント である。このエピソードを効果的に挿入しつつ、著者は、ベイカーに向けられていた称賛が、宗主国などヨーロッパ人側の「優越感から来る野蛮嗜好」、もしくは「美しい野蛮人」が「都会的に洗練」されていく姿に対する「文明ナルシシズム」であったと鋭く摘出している。

この他にも、20世紀以降の世界において肌の色の「有色性」が担った文化史的な意味や、そこに介在する権力をめぐる問題などについて考えるヒントが、本書には豊富に含まれている。いわゆる「ポストコロニアル」批評の諸作品が難解さゆえに手に取りがたいところがあることを考えると、これらの問題に触れる手がかりとして、滑らかな文章で書かれた本書の持つ意義は大きいように思われる。お気軽に手に取ってみたい一冊である。

(佐藤 章)

東京 青土社 2006年 250+vp.



朝倉世界地理講座 11
- 大地と人間の物語
アフリカ I

池谷和信・佐藤廉也・武内進一 編

この世界地理講座シリーズにおいては、アフリカは「I」と「II」の2冊に分けて紹介されており、本書はそのうちの一冊である。本書では総説、イスラームアフリカ、エチオピアが取り上げられており、「II」ではパントゥアフリカ、西アフリカ沿岸部、島嶼部が掲載される予定である。本書の特徴の一つとしては、対象地域をサハラ以南アフリカに限定せずアフリカ大陸全般としており、また地域を「北部」「南部」といった分け方ではなく、「イスラームアフリカ」や「パントゥアフリカ」といった分け方で紹介している点にある。

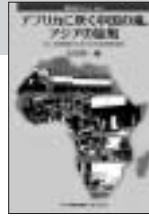
各地域は「風土と環境」「人々と暮らし」「国家と社会」という三つの章で紹介されている。それぞれの章は4節ほどで構成されており、多岐にわたるトピックが取り上げられている。たとえば、「イスラームアフリカ」の「人々と暮らし」に焦点を当てた第6章は、カピールの暮らしと社会、イスラーム女性とチュニジア、ソニンケ商人の歴史、モロッコの出稼ぎ民と故郷での生活、という4節で構成されている。歴史や女性問題、貿易や民族などさまざまな切り口から「イスラームアフリカ」を知ることができる点は本書の長所ではあるが、内容が多岐にわたりすぎており「イスラームアフリカ」の一般的なイメージをつかみにくいという短所もある。

評者が特に興味を持ったのは、第7章2節の「スーダンの飢餓・内戦へのまなざし」である。冒頭には「ハゲワシと少女」の写真とともに、その写真が掲載されている中学校の英語教科書の内容が紹介されている。続いて「ハゲワシと少女」の写真が撮影された地域の内戦の状況が記されているが、その内容はインパクトの強い冒頭の写真にも匹敵するほどセンセーショナルなものである。

本書は448ページにもものぼる大作であり、執筆者も28名にもものぼる。環境や紛争、経済や歴史などジャンルが多岐にわたっているため、自分とは直接関係のない分野にも自然に読み進められ、得るところの大きい書物である。

(原島 梓)

東京 朝倉書店 2007年 v+448p.



アフリカに吹く中国の嵐、アジアの旋風

- 途上国間競争にさらされる地域産業
吉田栄一 編

数年来アフリカにおける中国の存在が注目されているが、学界においてもヨーロッパの研究者を中心に関心が高まり、数多くの論文が生産されている。資源獲得や援助といった側面に注目が集まっている感があるが、大量の低廉なアジア製品の流入もアフリカ各国の経済にとって無視できない問題であり、本書はこれをミクロな視点からとらえようとしたものである。

第1章でアフリカ アジア間の貿易を概観しその背景となる通商政策の変化について整理した後、第2章から第4章までは、アジアからの輸入品の影響を最も強く受けた衣料産業について、南部アフリカ、ケニア、タンザニアの例が報告されている。南部アフリカとケニアでは国内・輸出市場ともアジア製品との競合が厳しく、企業が国際競争の波にもまれている様子が示される。衣料産業の規模が小さいタンザニアでは、輸入品の増加は古着流通に変化をもたらし、貧困層が多い古着商人の生計維持に影響している。第5章は世界的な生産ネットワークの一角となった南アフリカの自動車産業について、アジアの生産拠点との比較において競争力が分析されている。第6章は、衣料品や雑貨の輸入の担い手である中国商人の実態について報告している。統計資料ではとらえられないが、アジアの輸入品がアフリカの隅々まで行きわたる原動力となっている零細商人の姿が描かれている。

市場がアジア製品であふれかえる様子は、アフリカでは見慣れた光景である。一部の途上国企業が力をつけてきた現在、アフリカ企業のライバルは先進国企業よりもむしろ安価な製品を得意とする途上国企業となっていることを、本書は示している。企業・商人レベルでの観察に基づく論考であることも、本書の特長である。ただし、レポートという性質もあり、細部の事実確認や考察には物足りなさが残る部分も多い。さらなる研究の積み重ねにより、アジア製品との競争がアフリカの産業発展に与える影響について理解が深まるのではないと思う。

(福西隆弘)

千葉 アジア経済研究所 2007年 iv+161p.

